幻の優勝カップ

二十一期生　伊東　正明

私が卓球部部長になったのは、入学して半年位たった一年の秋で、まだ試合には一度か二度しか出場していなかった頃だと思います。例の、今にも崩れ落ちそうな、雨漏りはするし、夕暮になると球が見えなくなる、あの体育館で、それから一年間週三日ずつ練習していました。最後の頃まで残っていた同期の部員は、男女合わせて十二、三人でした。

我々の頃は決して強かったと言うわけにはいかない程度でしたが、特に高体連の大会は苦手で、明るく、大きな体育館で試合をした為か、一つ勝つと次は負けるといった調子で、インターハイとか国体とかは縁遠いものでした。今にして思えば、我々が西高の主力とは言っても、まだ二年生で、それで私立高の三年生に勝とうというのですから、こんな成績も当然の事であったのかも知れませんが。それでも、いつも負けてばかりいたわけではなく、相手も同学年の事が多かった都立戦では、何枚かの賞状を獲得したこともあるのです。

あまり輝かしいとは言えぬ戦績の中で、一、二位を独占した話を、忘れてしまわぬうちにここに記しておきます。

確か、我々が主力となって出場した最後の大会だったと思います。秋の都立戦で初めて賞状を獲得した後、その余勢をかって更にもう一枚というので、杉並区民大会高校の部に二チーム出場して、一、二位を独占したのです。残念ながら、これから記します事情で幻の優勝カップとなってはしまったのですが。

杉並区民大会高校の部は高円寺体育館で行なわれまして、我々は二年主力のAチームと一年生のBチームと、勇んで乗り込んで行きました。ところが、体育館はガラーンとしていて、いつもの活気溢れる試合会場の雰囲気とは大分様子が違うのです。それでも、役員らしき人が数人椅子にかけており、早速、出場のチェックに行ったのですが……組み合わせを見て！　出場するのは、何と四チームだけなのです。西高A、B、某私立A、B、その高校とは初手合わせで、首をひねってみたのですが、向こうの戦績が思い出せません。豊多摩、杉並あたりを対戦相手と想定していたのに、拍手抜けしたような、全く知らぬ相手なので不安なような気分でした。それでも兎も角、両チームとも一回勝てば上位独占というわけで、張り切って練習し始めたのです。ところが、いつまでたっても相手が来ないのです。「待ちかねたぞ、武蔵」ではないけれども、いつ現われるのやら、イライラしながらラケットを振り回していましたが、とうとう役員の方がしびれをき

らしたのか、相手方を欠場としてしまったのです。念願の上位独占とはいっても、何か損をしたような気分だったのですが、一応優勝チームを決めて下さいということで、盛り上がりのない決勝戦が行なわれたのです。こういった次第で初の団体優勝を成し遂げたのですが、表彰式は後日ということで、結局我々は修学旅行に、そして他に誰も受け取りに行かなかったのです。

当時、西高の集会では、クラブが賞状をもらうと全校生徒の前で発表されたのですが、ある日の集会で、都立戦の小さなカップが他の運動部の大きく立派なカップと並んで、校長から紹介されました。隣りのカップに比べて貧弱に見えるカップを見て、恥ずかしいような気分だったのですが、更に、顔面を張られた様なショックに襲われました。

隣りの大きいカップは、バレー部の杉並区民大会優勝カップだったのです。

無題

二十二期生　白木　哲夫

仰けから恐縮なのですが、TVで『黒の50』ですか、『G&G』ですか、黒人が実にリズミカルに踊っているコマーシャルがあるのを御存知でしょうか？　関節がカクッカクッと折れ曲がるのですが、それが云わゆる「きまっている」と言う表現がピッタリでして、それでいて彼等の肢体はリズムそのものなんですが、あれは私のようにギコチない身体の持ち主がやってみると、なかなかうまくできないもんでして、あんな風に肢体が律動したら喜ばしいであろうに、と嫉妬しているんですが、このように恵まれぬ身体の私でもかつてそれが躍動した記憶がありまして、それは卓球を通じてなんですね。

西高卓球部の歴史をひもとけば、強い奴も強くない奴も、うまい輩もそうでない輩もおりまして、そんな人々がその歴史を織りなして今日に至っているのでしょうが、私はそのでない方に属す一人なのですが、それでも卓球をやっている時に何度かこう私の肢体がリズミカルにしてスピーディーに律